

〔調査報告〕

GAアーティスト・イン・レジデンス

活動開拓調査/KKV Grafik Malmö

GA artist-in-residence activity pioneering survey
/ KKV Grafik Malmö

於保政昭

Oho Masaaki

01 趣旨・目的

本調査は、アーティスト・イン・レジデンス（アーティストが一定期間特定の地域に滞在し、その土地の文化や環境と関わりながら作品制作やリサーチを行う活動）の実現に向けた準備として実施した。今回の調査では、滞在先の環境や制作条件を確認するとともに、本学美術科とKKV Grafik Malmöとの国際交流を深めるための具体的な協力体制を構築することを目的としている。この活動は、創作活動を通じて新たな表現や視点を発見し、地域とアーティスト、さらには教育機関との持続的なつながりを生み出すための基盤を築くものとなる。特に「グラフィックアートコース」に関連する「アーティストブック」をテーマに据えた機関や活動の調査に重点を置いている。

欧米において、特にパリはアートや出版文化が非常に豊かであり、アーティストブックに関連するギャラリーや専門書店が数多く存在し、国際的なフェアも盛んであることが知られている。また、ベルリンやライプツィヒは印刷技術やブックアート分野において名高く、多くのアーティストや印刷技術者がアーティストブックを制作・展示している。これらの地域ではブックフェアや展示会が活発に行われ、国内外のネットワークが強化されている点も注目されていた。

本調査で着目した北欧におけるアーティ

ストブックの活動も、近年非常に活発であり、独自の文化的背景や社会的な課題を反映した作品が数多く生み出されている情報を得ていた。一般的な出版物とは違い、アーティストブックがコミュニケーションツールとしての役割を果たし、環境問題や社会問題をテーマとした作品が多いことが特徴として見られる。さらに、北欧のアーティストブックにはデザインとの密接な結びつきが見られる。北欧デザイン哲学に基づき、シンプルかつ洗練された表現を取り入れた作品が多く、装飾を最小限に抑えつつ、紙の質感やレイアウト、色彩の工夫により、視覚的な美しさと機能性を両立させていることが注目される。このように、北欧のアーティストブックにはミニマリズムと機能美を兼ね備えた独自の特徴が表現されている。

北欧においては、デザインとアートの要素を併せ持つような領域があり、アーティストブックもその例外ではない。グラフィックアート、タイポグラフィ、ブックバインディングの技法が相互に融合した作品が多く見られ、視覚と触覚の両面を活用した表現が見られる。デザイナーがアーティストブックの制作に関与することも一般的であり、その結果として多様で実験的な表現が可能となっている。このような制作環境において、北欧のアーティストブックは従来の枠組みを超えた創造性を発揮しているといえる。また、デザインを通じて社会的問題を提起することが重視されており、環境問題やジェンダー平等といったテーマを取り扱う事例が多い。こうしたテーマに対する取り組みは、アーティストブックを一種のメッセージ媒体として位置づけ、社会問題の解決や認識向上に寄与するものとしての役割を果たしている。その中には、視覚的インパクトやシンプルかつ直感的な表現を通じて、複雑なメッセージ

を効果的に伝える手法がとられ、社会に対するアートの力を示す象徴的な存在となっている。



「formed design center(フォルムデザインセンター)」

スウェーデン・マルメ地域でも、戦後の文化政策の一環として建築やデザインに対する支援の制度化が進んでおり、政府によってアートとデザインは文化活動であるという位置づけがなされている。1960年代に展開した「スタジオ・クラフト」運動は、工芸の自律、産業デザインの多元化といった流れをつくった。1990年代の不況から公的資金は削減を辿っているが、芸術・デザインにはよりいっそう力が注がれている。この背景の中で、コンスナーレルナス・コレクティーヴァ・ヴェルクスタッド・グラフィック・マルメ (KKV Grafik Malmö) は、アーティストがグラフィックの制作やプロジェクトを開発できる施設とスタッフの環境を備えており、地域のクリエイティブ活動を支える重要な拠点として注目されている。



今回の調査では、本学との交流・交換レジデンスの機会を創出する目的で、KKV Grafik Malmöの可能性を探求することも含まれている。特に、多文化的な都市としてのマルメの環境は、アーティストが異なる文化や価値観に触れることで新たな視点を生み出す契機となり、制作活動にも反映されることが期待される。このような場での国際的な活動や特徴を踏まえ、本学のアーティスト・イン・レジデンス事業の方向性を示唆する重要な資料として活用されることが期待される。

02 地域性

02_01 北欧のグラフィックアート

北欧の国々、具体的にはスウェーデン、ノルウェー、フィンランド、デンマーク、アイスランドは、それぞれが独自の文化的背景とアイデンティティを持ち、その特徴はグラフィックアートにも色濃く反映されている。これらの国々に共通する点は、視覚的な美しさとともに、社会や環境に対する深い洞察が込められているところであり、グラフィックアートは単なる装飾ではなく、日常生活に密接に関連したメッセージを発信する手段として機能している。

フィンランドでは、シンプルで機能的なデザインが重視され、わかりやすいところでは「マリメッコ」スタイルやムーミンといったキャラクターアートが象徴的である。これらの表現は、無駄を削ぎ落としたミニマリズムに基づいており、色数を抑えた淡い配色が特徴的で、質感のあるナチュラルな素材が多く使用されている。これにより、視覚的にインパクトがありながらも、落ち着いた美しさを持つ作品が生み出されている。デンマークにおいては、北欧特有の美学と都市的デザインの融合が特徴的で、その洗練された表現は、現代的で

スタイリッシュなデザインアプローチがあり、自然環境との調和を重視しつつ、都市生活における機能性や簡潔さを視覚的に具現化している。これらの作品は、ミニマリズムの哲学を体現しつつ、洗練された色彩やレイアウトの中に、持続可能性や自然との共生という価値観が織り込まれている。

北欧のグラフィックアートにおける特徴的な要素は、自然への敬意を示す点である。作品には森林や湖、動物、植物といった自然のモチーフが頻繁に取り入れられ、自然景観や季節の変化を反映したデザインも多く見られる。また、持続可能性というテーマが重要視されており、環境問題やジェンダー平等、多様性の尊重といった社会的課題がアートを通じて表現されることも少なくない。これらのテーマは、公共空間で展示されることもあり、社会問題に対する意識を広める役割を果たしている。



「formed design center (フォルムデザインセンター)」

さらに、北欧のデザインでは、その機能性にも特徴がある。視覚的な美しさだけでなく、実生活で活用できるデザインが重視されており、ポスターやロゴ、インフォグラフィックスなど、情報伝達的手段としても優れた効果が見られる。また、デジタル技術の導入が進み、インタラクティブなデザインやアニメーションといったデジタルアートも多く展開されている一方、伝統的な木版画や手書きの要素が取り入れられることで、温かみのある作品が生まれ

られ、デジタルと手工芸の融合が見られる点も、北欧デザインの大きな特徴である。総じて、北欧のグラフィックアートは、その美的価値だけでなく、社会的・環境的なメッセージを伝える手段としても強い影響力を持っており、視覚的なインパクトと同時に、私たちが生きる世界に対する深い洞察や提案を行うアートとして評価される。

02_02スウェーデン／マルメ

マルメはスウェーデン国内でも特に多文化が集まる都市であり、その住民の40%以上が外国にルーツを持つ状況がある。アートやデザインにもその多様な文化的影響が表れ、街全体が異なるバックグラウンドを持つ人々で構成されているため、異文化交流がアートプロジェクトにも反映され、ダイナミックな文化的融合が生み出されている。



「Malmö Konsthall (マルメ・コンストホール)」

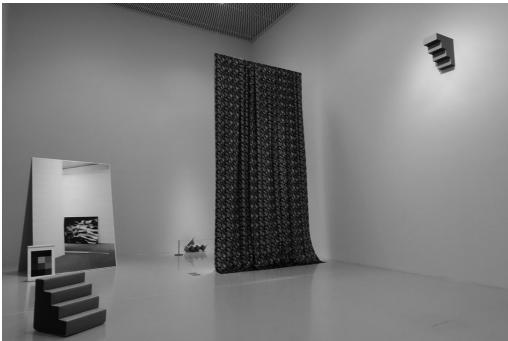
この多様性が、マルメのアートシーンに独特の創造性を形成して、エリア全体に独特のエネルギーを生み出しており、アートやファッション、音楽、料理などに反映され、モレヴァンストルゲット広場では、多国籍な食品や製品のある風景が並び、このエリアを象徴するスポットとなっている。その背景には、1990年代初頭の経済危機後、オーレスン・リンクの開通により、コペンハーゲンとマルメを中心とする約370万人の人口を擁する広域経済圏が形成されたことに

より、マルメは工業都市から知識集約型産業の中心地へと転換し、新たな住民や企業を惹きつけることに成功している。



「Malmö Konsthall (マルメ・コンストホール)」

市街地では「Malmö Konsthall (マルメ・コンストホール)」や「formed design center(フォルムデザインセンター)」などのギャラリーがあり、若手アーティストや独立系デザイナーの拠点となって、地元の才能を発表するだけでなく、国際的なアーティストの展示も頻繁に行われ、アーティストたちはここで制作や展示を行い、自由に交流している。街中にアートを取り入れ、公共空間を活用したアートプロジェクトを推進し、ストリートアートやグラフィティアートも見られ、地元および国際的なアーティストによるさまざまなストリートアートが描かれている。



「Moderna Museet Malmö (マルメ近代美術館)」

現在のマルメは、工業中心の経済から知識を重視する産業へと転換を図り、文化や芸術を都市再生の重要な柱とし、この取り

組みの中で、アーティストが利用できる共同ワークスペースを整備し、国際的な芸術都市を目指して施設づくりを進めていた。教育と芸術の融合では、マルメ大学の設立などがアーティストの育成や支援にも影響を与えた。そして施設の活用では、マルメには多くの歴史的建造物や産業遺産が残されており、こうした建物をアトスペースとして再利用するところも多く見られる。産業構造の変化に伴い、文化と知識の中心地として自らを再定義する努力を進めた都市である。

03 KKV Grafik Malmö概要 (コンストナーレルナス・コレクティー ヴァ・ヴェルクスタッド・グラフィック・ マルメ)

KKV Grafik Malmö (以下 KKV)、Konstnärernas (コンストナーレルナス) は「芸術家たちの」という意味であり、「konstnär」は「芸術家」を指し、Kollektiva (コレクティーヴァ) は「集団的な」「共同の」という意味、Verkstad (ヴェルクスタッド) は「工房」「作業場」「ワークショップ」を意味しており、芸術家たちの共同工房」や「芸術家のための共同ワークショップ」という意味になる。1984年に設立された非営利団体で、スカーネ地域およびマルメ市の支援を受けて運営されている。地域の芸術家や印刷技術に関心のある専門家に対して、印刷技術を用いた作品制作のための設備と作業スペースを提供することを目的とし、アーティストがグラフィックのアイデアやプロジェクトを開発して、実験できる設備の整ったワークショップ=工房として紹介されており、現在、約130名の会員が所属している。所在地はマルメのダラプラン近くの Västmanlandsgatan 3 にあり、住宅や商業施設が混在するエリア。この近辺は、多様なバックグラウンドを持つ住民が住んでおり、国際的で活気のあるコミュニティが見られる。エスニックなレストランやマーケットも多くある地域で多文化的な雰囲気が感じられた。建物内はリノベーションされ、ビジネスや商業活動があつまり、多くの企業やスタートアップが集まっている建物内の一部に設置されている。



「KKV Grafik Malmöエントランス」

281平米の工房は明るく開放的。インタリオ印刷、グラビア印刷、シルクスクリーン印刷、リトグラフ、活版印刷の設備があり、手製本設備も備えていた。KKVはアーティストインレジデンスにも取り組んでおり、レジデンス先にアメリカ「Womens Studio Workshop」とドイツ「クンストラハウス・ルーカス」への派遣先を持っている。日本との交流も2016年より2年ごとに名古屋芸術大学との交流プログラムを開始していた。レジデンス参加には、アーティストとしての実績やポートフォリオが求められ、特に版画やグラフィックアートに関心があることが重要である。基本レベル以上の版画や印刷技術に関する知識や経験が必要。数週間から数ヶ月の滞在が可能で、アーティストはその期間中に滞在し、個別の制作室と24時間スタジオアクセスを許される。他のアーティストと制作活動を行うことができる柔軟性とスタッフとの交流を円滑に進めるために、英語やスウェーデン語でのコミュニケーション能力があることが望ましい。この交流プログラムによって、地域のアーティストは国際的な視野を広げることができ、国内外のアーティストとの交流を促進することを積極的に取り組んでいるところである。

04 施設環境調査

KKVにおける施設、機器の紹介は公式サイトにて概ね確認は出来ていた。とはいえ、実際の使用感は日本の機器とは異なる点も当然予想される。現地での調査においては、本学グラフィックアートコースでの主力技法であるインタリオ技法及びシルクスクリーン技法に絞ることにした。インタリオ技法は腐食銅版に関わる手法、ハードグランド・ソフトグランドエッチングを用いることにした。シルクスクリーン技法では、写真製版を主として、デジタルデータの出力の再現性の確認を主として、それぞれの材料を持ち込み、現在、グラフィックアートコースで培われている技術や取り組みとの共通点や相互性に注目し、それらをいかに活用・応用できるかを重視することとした。

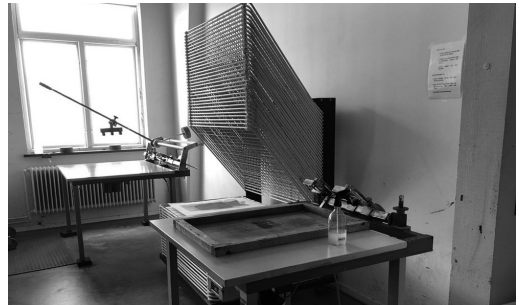
現地での調査に先立ち、KKVで配備された描画ツール及び材料を問い合わせたところ、詳細な状況をつかむことが出来なかった。語学力不足というのものもあるが、版画制作におけるツールの多様性が挙げられる。版画技法における描画ツールは、アーティストにより、その使い勝手は多種多様であり、日本で一般的な既製品のようにあっても、アーティスト個々の研究や創意工夫により創作された独自のツールを既製品化したものも少なくない。よって当然ながらツールの名称においても、日本とはそのニュアンス差が現れた。

このような観点から、グラフィックアートの専門的な分野の翻訳ができること、グラフィックアート及び版画の専門知識は要求される。例えば、インタリオ技法とは、日本ではあまり馴染みがなく、凹凸版版画を意味するところだが、凸版の場合は主に木版画と称し、凹版を主に銅版画と称する。凸版の木版画は日本ではウッドカットを指すが、北欧ではリノカット（リノリウム

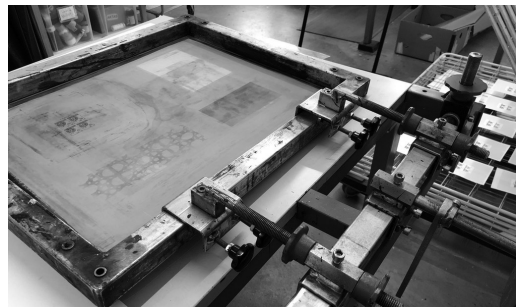
版）が多く、素材による総称使い分けが一般的に見受けられた。KKVとの連絡間で、調整出来なった部分に関しては、出来得る限り日本から道具を持ち寄ることとした。詳細に関わる場所は、次に各版種による報告を添えるとする。

04_01シルクスクリーン

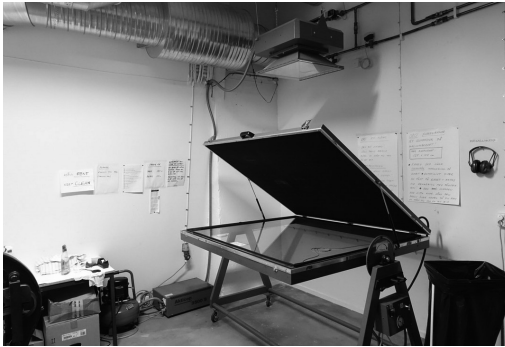
バキュームプリンターを大中小と3台有している。それぞれのテーブルサイズは、Lサイズ188x124cm、Mサイズ125x99cm、Sサイズ95x83cmであった。吸着面はそれぞれ一回り小さいのは一般的な製品に準ずる。機能及び性能面は日本の物と同等。



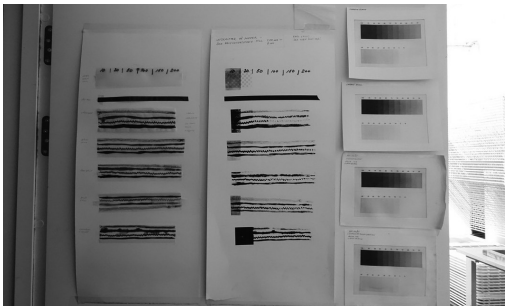
大きな違いは、スクリーンのアルミフレーム枠であった。日本で一般的な枠の太さからすると2.5倍程太く、重量もある。これは、ここのバキュームプリンターの機能に仕組みがあり、枠の重量によって、プリント時の枠の上げ下げを保つ仕組みに関連していると思われる。この重量バランスの設定は、日本のものより使いにくさを感じたが、作品の出来上がりには特に問題はない。



製版室は十分に暗室化されている。露光機はバキュームタイプの密着機があり、テーブルを反転させて、露光機に照射するタイプで、部屋全体に紫外線を照射する状況であったため、積算光量計のスイッチパネルは室外からコントロールする設計になっていた。簡単なレクチャーを受ければ特に使用に関しては問題なく行えた。



感光乳剤はジアゾ感光系のものを使用していた。塗布感及び感光時間も大きな違いは感じなかった。使用したグラム数を報告



部屋の各所にサンプルデータの貼り紙もあり、大いに役立った。スクリーンの洗いは、日本でも良く見かけるスタイルで、

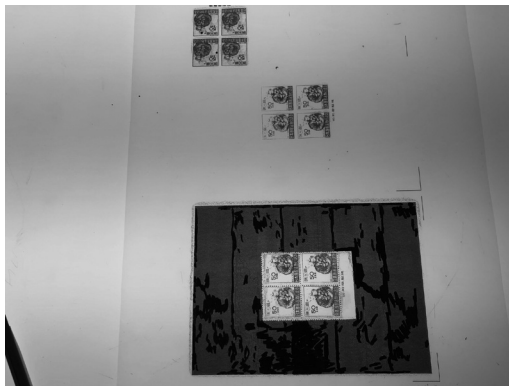
高圧洗浄機とバックライトの装備がある流し台が設置してある。この部屋には、乳剤のバケットやプリントスキージなどを併せて洗浄する流し台が設置してある。KKVのレクチャーにおいて、乳剤の塗布もこの場で行うと説明されたが、当該施設は外光がかなり入り込む環境にあり、乳剤の感光性を考慮すると、適切な環境とは言い難い状況であった。そのため、感光に対する安全性を重視し、私は念の為、乳剤の塗布作業を暗室で実施した。



スクリーン枠の乾燥機は、平置き型の乾燥機が使用されていた点も注目される。このタイプの乾燥機は乳剤の塗布を均一に仕上げる点で有利であると考えられるが、ホコリの付着リスクが高まる可能性が考えられる。一方で、日本国内で一般的な縦置き型の乾燥機は、ホコリの付着を抑制するという点で合理性を持つと推測される。これらの相違点はそれぞれの自然環境も関連していることも考えられた構造ではないかと思われる。



制作では、デジタルデータを用いた写真製版技法に取り組んだ。版下は、OHPフィルムにレーザープリントまたはインクジェットプリントを用いて作成したが、いずれの場合も本学グラフィックアートコースで作成される版下と比較して、黒面のインクの定着がやや劣るように見受けられ、白場の汚れも相当付着した。しかしながら、この差異は製版プロセスにおいて大きな影響を及ぼすものではなく、光量や硬化プロセスの調整によって適切に対応可能であることが確認された。



OHPフィルムは、プリントメディアが安価な点と、容易にプリントできる点を踏まえると、学生による授業内での利用について、導入する検討が可能と考えられるが、プリンタの能力の対応と光源を通さない原稿を作成させる指導を実施していることから、その再現性は乏しく、正しい原理を伝達するメディアとしては、一考の余地がある。

シルクスクリーン技法では水溶性インクを使用してプリントを行ったが、日本で使用されるインクと比較して、特筆すべき相違点は見られなかった。ただし、当地のインクは粘度がやや高い感触があり、さらに乾燥後のアクリル質のエマルジョンにおける光沢が抑えられている印象を受けた。この特性は、個人的には、表現として非常に好ましい要素であり、特にマットな質感を

求める作品制作において有用と感じた。



シルクスクリーンの制作環境については、この後改版工程を含めた全体のプロセスにおいて、日本の一般的な方法と大きな相違は見受けられなかった。機器の整備状況および制作動線の確保は、プロフェッショナルの視点から十分に設計されており、効率的な作業環境が構築されていると評価できる。ただ、本制作時は他のアーティストが作業を行っていない状況で作業を進めることができたため、複数人が同時に作業を行った場合には、一定の作業スペースの制約が生じる可能性があることが考えられる広さである。なお、今回の制作ではプリント作業に費やされた時間が約1日であったことから、詳細な環境評価や長期的な使用状況の検討には至らず、あくまで環境調査レベルで終えたことを付記しておく。

04_02 インタリオ

施設全体の約50%が、その機能に割り当てられている。インタリオプレス機が3台、日本では凹版プレス機、エッチングプレス機、版画プレス機などの名称で呼ばれる。プレスベットサイズ73x150cmが手動。80x150cmと90x170cmがそれぞれ電動のタイプが設置されている。



また、施設内には小型高圧プレス機が設置されていたが、その具体的な使用方法については、今回の調査で確認することができなかった。そのほかにも小型のプレス機は存在していたが、用紙の圧着等に使用されるものと推察された。



プリントに関しては上記のインタリオプレス機が3台である。この環境において、本学グラフィックアートコースで取り組むインタリオプリント技法の腐食エッチングで検証を行うこととした。版材は日本から1ミリ厚銅版を3枚、事前に磨きを掛けたものを用意した。自作では、防蝕剤にソフトグラント主に使用していることから、「シャルボネール・固形ソフトグラント」を持参しておいた。

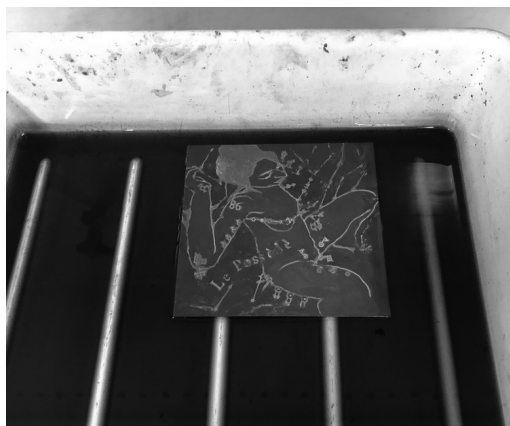


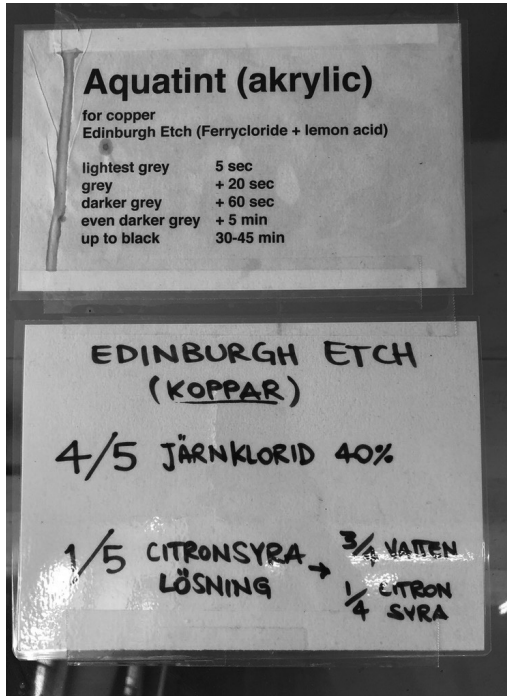
KKVにおけるレクチャーを通じて、本学を含む多くの教育機関で現在も使用されている有機溶剤が、KKVでは基本的に使用されていないことが判明した。ただし、これは古典的な技法に必要な材料を完全に禁止しているわけではない。

使用にあたっては、十分な換気設備の利用およびマスクの着用を義務付けるなど、安全性を確保するための対策を徹底して講じることが求められて、材料は厳重に切り分けて保管されている。この方針は、利用者が危険性を十分に理解し、安全を考慮した高い危機意識を見ることができた。



腐食工程においては、一般的に使用されるエンジンバラエッチ液が用いられていた。その調整に関する情報は作業場に掲示された張り紙から確認することができたが、記載された濃度は、本学グラフィックアートコースで現在使用しているものと同一であると推察された。





グランド以外の防蝕剤には、床コーティング材とアクリル系の塗料を使用している。ソフトグランドに変わる防蝕剤は見当たらなかったため、防蝕剤強化にアクリル系の塗料を使用してその効果を確認することとした。



腐食工程においては、重曹を用いた中和および洗浄作業が実施され、大きな問題は見られなかった。しかし、日本で一般的に行われる酸化防止のための醤油の使用は、現地においてはコストの観点から難しいと考えられる。また、アクリル系塗料による防蝕材の除去作業は非常に困難であった。KKVのレクチャーでは、重曹溶液に一晩漬けることで除去可能と説明されたが、実際には容易に落とすことができなかった。このことから、防蝕材の除去には別の溶剤の使用が想定されていた可能性が示唆される。

プリント工程に関して、日本では依然として油性インクが主流である一方、スウェーデンを含む北欧地域では水溶性インクが主に使用されている。なお、本学グラフィックアートコースでは、シルクスクリーン技法において2011年より全面的に水溶性インクへ移行し、制作を行っている。しかしながら、インタリオやリトグラフ技法においては、従来通り油性インクを使用している。この理由にはいくつかの要因が存在する。



まず、水溶性インクやその関連資材の入手が難しく、またそれらが高価であるという経済的な理由が挙げられる。さらに、水溶性インクの導入による制作工程の変化が、従来技法の技術的継承や表現の質に対して違和感を伴うことも、一部で課題として認識されている。これらの理由により、日本では、油性インクを用いた従来技法が引き続き採用されている状況が根強く残っている。



本調査では、水溶性インクを用いたプリントに挑戦した。使用したインクは「Aqua」、日本でも早くから認知されているインタリオ用水性インクである。日本で主に使用されているプロフェッショナルな油性インクのスタンダードは「シャルボネール」であり、このインクと「Aqua」は粘度や色調の点で顕著な違いが見られた。油性インクでは、寒冷紗やガーゼを用いた拭き取り工程を経て、紙を使ってインクを拭き取るのが一般的であるが、「Aqua」の場合、インクが非常に低粘度であったため、寒冷紗での拭き取りによってほとんどのインクが取れてしまう結果となった。

こういった点からも、今までのテクニックが通用しないような場面が、技法の変化に対する抵抗感を強く感じる要因ということを肌で感じとることとなった。しかしながら、これが極端に難しいというわけではない。インクの色味については、個々の好みによって大きく異なる。色の深みや艶に

関しては、シャルボネールのインクに比べると劣るものの、それまでの価値観と異なる表現方法として捉えれば、インクの質自体が劣ると評価するほどではなかった。



印刷用紙としてハーネミューレを使用し、KKVからのレクチャーに従い、本来プレスに際しては、水に浸し紙を柔らかい状態でプレスするが、ほとんど濡らさない状態での作業が推奨された。そのため、紙の表面のみを水に浸し、布で挟んで水気を取り除いた後、プレス機で刷り上げた。乾燥方法に関しては、日本では通常、板に水張りテープを使用し乾燥を待つが、KKVでは紙の水気を取るボードに挟んで圧力をかけて乾燥をさせていた。時間の都合上、1日程度の乾燥時間を確保し、概ね乾いた状態で作業を終えた。

インタリオ技法、ここでは銅版エッチング技法を指すが、これには一定の技法知識と技術的な経験が求められる。技術の応用によって制作は問題なく進行可能であり、作業環境も十分に整備されていた。しかし、個人的には語学力の不足により、専門的な用語の解釈に難しさを感じる場面が多々あった。特に腐食技法においては、使用される材料が多岐にわたるため、日本ではまだ広く使われていない水溶性インクや有機溶剤を使用しない作業材料が含まれており、その環境面で深く理解できなかったことが課題となった。

04_03オフセット・活版・リトグラフ

施設には、リトグラフプレス機は設置されていなかったが、オフセット平版印刷機が1台配備されており、サイズは60×80cm、電動モーターが付属していた。また、活版印刷機としてヴァンダーグック社製の「No.4プルーフプレス」が1台設置されており、印刷ベッドのサイズは約50×38cmであった。リトグラフに関しては、数枚の石版が保管されていることを確認したが、今回の調査では制作準備を行わなかったため、実際の活用についての詳細な検討は行っていない。



本調査は主にシルクスクリーン技法とインタリオ技法の制作環境を評価することを目的としていたが、予期せぬ成果として、このヴァンダーグック活版印刷機との出会いが挙げられる。特にこの機器は、グラフィックアートコースでの可能性を広げる重要な契機となったと言える。さらに、幸運にも施設の代表管理者であるエヴァ・ヘイドストロム氏によるレクチャーを受ける機会を得たことで、活版印刷の簡易的な制作工程について基礎的な知識を得ることができた。この経験は、本調査における予想を超えた重要な成果の一つであったため、ここに記録する。



和文の活字には、ひらがな、カタカナ、漢字が含まれるため、その構成上、欧文に比べると活字書体のバリエーションは少ない。KKVには、鑄造された欧文フォントおよび木製のフォントが備えられており、約50種類程度のフォントが確認された。しかし、各フォントにおける活字の総数はそれほど多くなく、長文の本文を組版できる規模には達していない印象であった。



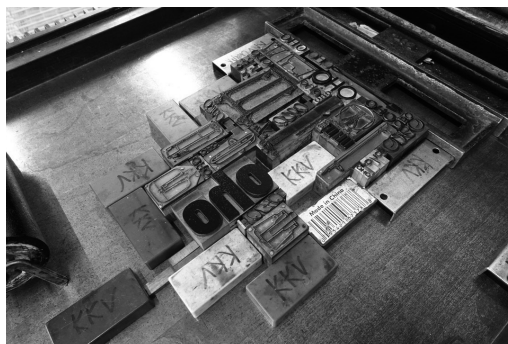
活版印刷は、活字を組み合わせて版を作成し、インキを塗布した後に圧力を加えて印刷を行う技術である。そして活字組版は、活字だけでなく、行間を調整するためのインテルや余白をつくるためのスペースなどを組み合わせる必要がある。活字は基本的に行ごとに配置されるため、デジタル環境のように異なるサイズや種類の文字をランダムに並べることは困難であるが、その制限ゆえに、印刷物には活字特有の表情や魅力が生まれている。



近年では、コンピュータ技術の普及により活字組版技術は急速に失われつつある。デジタルフォントにはその整然とした美しさがある一方で、活字印刷には独特の温かみや美しさが存在する。機械的な均一性とは異なる人間味を帯びた質感が表現される。また、活版印刷のプロセスは、最終的な仕上がりに向けたデザインの意識を高めるという点でも大きな魅力を持つ。このように、活版印刷は単なる印刷技術にとどまらず、独自の文化的および美的価値を有していると考えられる。



KKVにおける活版印刷の組版作業は、自由度を高めるため、マグネットを使用して活字を固定する方法が採用されている。この方法により、文字の大きさや行の配置を自由に調整することが可能となり、複雑なレイアウトが実現できる。



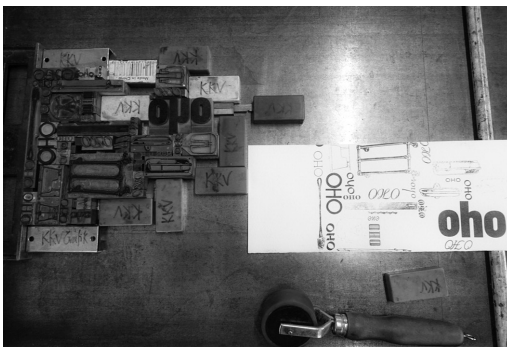
実際の作業では、複数の書体を組み合わせ合わせた配置を行い、テストプリントを実施した。文字サイズの違いによって生じる余白や空間は、適切なスペース材を用いて埋め合わせることで調整が行われた。また、イラストプレートを間に挿入することで、文字と図版が調和した組版で完成させた。このようなマグネット固定による組版手法は、レイアウトの自由度を向上させるだけでなく、デザインの多様性を高める点でも非常に有効であると考えられる。



インクの粘度は特段の調整を行わず、ローラーを用いて活版の凸部分に均等に塗布した。この際、一般的な凸版印刷で使用する程度の粘度で問題なかった。しかし、初期段階では刷りムラが発生する。その主因はインクの性状よりも、活字の高さの不均一性に起因するものであった。



プリント用紙をロールシリンダーに巻き付けてプリントする仕組みが用いられており、この構造上、紙厚も当然影響する。具体的には、複数枚の紙を重ねてセットすることで、活字の高さのばらつきを抑えて、軽減できる部分もあるが、それでもなお鮮明な印字が得られない部分が残る場合には、テーブルと活字の間に紙を挟み込み、活字の高さを微調整することが必要である。こうして全体的ムラなく印刷が可能になるまで調節する。圧力を高く加えることで活版印刷の魅力、特有の質感が強調される。



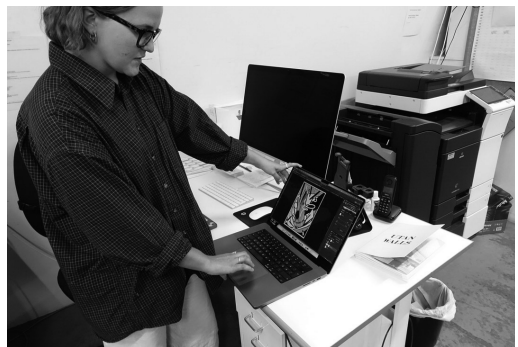
具体的には、文字のエッジにわずかにインクが盛り上がる現象が生じ、これにより文字の輪郭が強調される。また、印刷面に微細な凹凸が形成されることで、デジタルプリントやオフセット印刷とは異なる独自のニュアンスが生まれる。アーティストブック制作における活版印刷の利点は、物理的な質感、素材選びの自由度にある。厚手の紙やテクスチャがある紙にも対応可能。そのため、紙質自体が作品の一部とな

るアーティストブックでは、素材選びの自由度が広がり、より創造的な表現が可能となり、オフセット印刷やデジタル印刷では再現が難しい手触りや視覚的な深みを与える要素として優れている。

04_04デジタルプリント

KKVのデジタル設備としては、Apple iMacが2台設置され、Adobeのグラフィックアプリケーションがインストールされていた。ただし、調査時には個人所有のラップトップPCを持ち込んで作業を行ったため、詳細な検証は行っていない。工房内ではWi-Fiによるインターネット接続が可能であり、デジタル環境としての利便性は十分に整備されていた。

プリンター設備は、カラーインクジェットプリンタとカラーレーザープリンタがそれぞれ1台ずつ設置されていた。具体的には、Epson Surecolor T3200とOlivetti D-Color MF 304が稼働しており、いずれもヨーロッパ仕様の機種と推測される。特にOlivettiはイタリアのメーカーで、日本ではあまり馴染みのないブランドであるが、ドライバーをインストールすることで問題なく使用することができた。



作業においては、準備した版下データをOlivettiプリンターでOHPフィルムに印刷したが、トナーの定着が不十分で、不要な汚れも目立つ結果となった。一部修正を試みたものの、時間の制約から修正を断念し、

そのまま製版を行った。しかし、結果として製版には大きな影響を及ぼさなかった。一方、Epsonプリンターについては、日本国内の仕様と類似しているため、テストは見送ったが、現地のアーティストが同プリンターを用いてOHPフィルムにプリントを行う様子を観察した。この場合、トナーの汚れは見受けられなかった。

OHPフィルムの品質や使用状況については、今後の課題としてさらに検討する必要がある。特にOHPフィルムでのレーザープリントでは、今までの経験から精度の高い版下には向かないと判断していたが、製版に与える影響をより詳細に検討する余地があった。



04_05 ツール・製本・その他

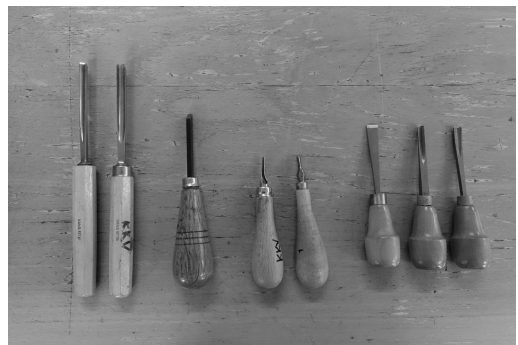
KKVでは、エングレービングに使用するビュランや、木版およびリノカットで使用する各種彫刻刀が数多く備えられていた。これらの道具に関して、その詳細な仕様や専用性については調査が及ばなかったものの、用途別に整理されている印象を受けた。また、製本工程で用いる裁断機や箔押し機なども完備されており、制作環境として十分な設備が整っている。これらのツール類や設備の一部については、写真資料を掲載し、今後の利用時に検討を深めたい。



エングレービングツール

雑多に箱の中にビュランが入っていた。主に銅版画や木口木版の技法で用いられる。刃先が四角形の断面を持つスクエアビュラン、断面が菱形の菱形ビュランが多く、日本で見る3連ビュランなどは見当たらなかった。持ち手の形状も日本の物と殆ど変わらない。一方で木版やリノカットで使用すると思われる彫刻刀は、刃先も持ち手も日本の彫刻刀とは異なっていた。持ち手は、基本的に長いものではなく、手のひらに収まるようなサイズ感のものが多く見受けられた。恐らくビュランは日本に輸入されたままで、形状の進化が見受けられなかった。

また、その他のツールを以下写真で掲載しておく。



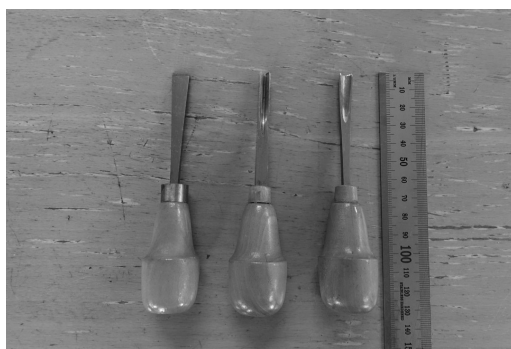
木版・リノカット彫刻刀



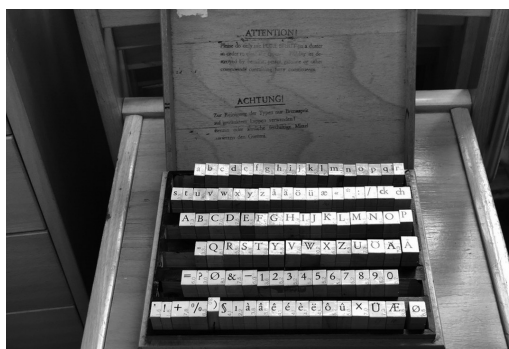
木版・リノカット彫刻刀



裁断機



木版・リノカット彫刻刀



ゴムスタンプ



エッチングツール



目打穴開機



リトグラフインクとローラー



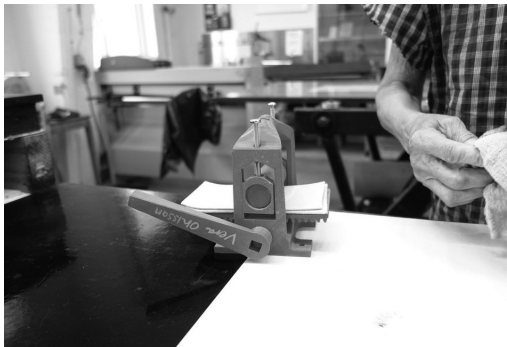
スプレーアクアチント

05 制作追補・アーティストとの交流

05_01ヴェラ・オールソン



KKVに所属するアーティスト、ヴェラ・オールソン氏は、ポリマープレートを用いた写真インタリオ技法を取り入れたワークショップ形式の制作プロセスを紹介した。このワークショップで使用された3Dプリンターによる小型プレス機は、そのコンパクトな形状にもかかわらず、高い精度を持つことが確認され、予想以上の性能に驚きを覚えた。このプレス機的设计データはオープンソースとして提供されており、Webサイトからダウンロード可能であるとされる。



ヴェラ氏は過去に名古屋でアーティスト・イン・レジデンスの経験があることも影響してか、私にインタリオ印刷や腐食製版に関する詳細な知識を惜しみなく共有してくれた。



その中でも特に、水性インクの使用についての解説は、新たな知見として極めて有益であった。このような技術的な交流は、制作技法の拡張や新たな表現の可能性を探る上で、極めて重要な意義を持つと言える。



05_02ジャネット・リンドステット

KKVに所属するアーティスト、ジャネット・リンドステット氏は、ヴェラ氏とともに名古屋でアーティスト・イン・レジデンスに参加した経験を持つアーティストである。今回のKKV訪問計画は、元名古屋芸術大学教授の西村正幸氏の紹介によって進められた。当初、KKVへの直接的なコンタクトを試みたものの連絡が取れない状況が続いていたが、ジャネット氏を通じて訪問の機会を得ることができた。彼女の尽力により、KKVの施設調査および滞在制作の提案が実現し、本調査を行うための具体的な基盤が構築された。

滞在期間中には、彼女の提供した宿泊先や綿密なアテンドの支援が調査活動を円滑

に進める上で大いに寄与した。ジャネット氏の協力なくしては、本調査がここまで成功裏に完遂されることは困難であったといえる。これらの成果を、本調査の重要な要素として記録に残したい。

05_03エバ・ベルク

エバ・ベルク氏は、KKVに所属するアーティストであり、同時にマルメ大学の教授を務める人物である。また、今回の宿泊先のオーナーでもあり、自宅兼アトリエの一室を滞在先として提供してくれた。彼女との交流を通じて、マルメにおける社会的および文化的状況についての知見を得るだけでなく、移民問題やマルメの若者文化についても具体的な事例を交えた話を聞く機会を得ることができた。例えば、移民問題に関しては、移民コミュニティの急増が引き起こす住宅供給の逼迫や、文化的背景の異なる住民間での社会的融合の課題、ストリートアートや音楽シーンといったサブカルチャーが、移民の若者たちにとって自己表現の場となり、社会的疎外感を軽減する重要な役割を果たしているとの情報も知ることとなった。



エバ氏のフランクな人柄には大いに助けられ、一般住宅での滞在中を通じて、地域の日常生活に直接触れる貴重な機会を得ることができた。この滞在環境は、調査内容を深化させると同時に、多角的な視点からの体験を可能にし、マルメの多様性に根差し

た文化を直感的に理解する上で極めて有意義であった。このような特別な経験を提供してくださった関係者に、心より感謝の意を表したい。

05_04片山 浩



片山浩氏は、名古屋芸術大学准教授で専門はリトグラフである。2019年にマルメでレジデンスを経験されており、今回の調査においても重要な役割を果たしてくれた。彼は、ベニスでのワークショップを担当するタイミングを活かし、マルメにて私と合流した。KKVのヴェラ氏およびジャネット氏と深い親交を有していたことから、制作面での交流の橋渡し役としても多大な貢献をして貰った。さらに、KKVにおいて、私自身が時間的制約から取り組めなかったリトグラフに関する実験を、片山氏が実施され、その結果として得られた情報は、調査内容の充実に寄与するものであった。



この調査において、彼の豊富な海外経験と、私とKKVアーティストとの交流に共

感を運んでいただきサポートしてくれたことが、大分とマルメ間のアーティスト・イン・レジデンスにおける新たな交流の機会が創出されたことは特筆に値し、ここに、片山氏の多大なるご支援とご尽力に対し、深甚なる謝辞を述べたい。

06 考 察

本調査を通じて、マルメのアートスペースであるKKVにおける制作環境と技法、地域との文化的結びつきについて多角的に検証を行った。その中核を成した滞在制作では、KKVの施設と設備を活用することで、多岐にわたる知見と技術を得ることができた。特に、シルクスクリーン技法における乳剤の硬化プロセスや水性インクの挙動、日本国内で使用しているインクとの違いに触れたことで、新たな表現の可能性を見出せた。例えば、水性インク特有の粘度や乾燥後の質感が作品に与える影響について、従来の技法とは異なる感触を得ることができた。また、活版印刷においては、文字やフォントを組む際にマグネットを用いて固定する手法から、文字間や行間の微妙な調整を可能にし、従来の金属製フレームを使用する方法に比べて、配置の自由度が高い点が特徴的の印刷機を見ることができ、よりアーティストイックな使い方を見た。デジタル印刷は、均一で精密な配置や一貫性のある仕上がりりが得意である反面、活版印刷のような偶然性や、手作業から生まれる揺らぎによる表現は得られにくい。活版印刷のインクの盛り上がりや紙への押し込みによって生まれる特有の質感は印刷における表現の幅広さを改めて実感した。さらに、インタリオ技法における製版や印刷プロセスについても実践的な理解が深まった。特に、インタリオの基本的な製版方法においては、金属版や銅版を使用した

伝統的な手法に触れ、その版面をどのように操作するかが印刷結果に与える影響を実践した。特に、ノントキシックな手法で使用する水性インクやエコロジカルな材料を活用することで、従来のインタリオ技法が環境に配慮した方法で実践可能であることを体感することとなり、これにより、健康面や環境への負荷を減らしつつ、アート制作における創造的な表現が広がる可能性を感じた。ポリマープレートを使用した技法も一般的であった。伝統的な金属版による製版と同様に、インクを均一に適用し、版の凹凸をどのように操作するかが印刷におけるクオリティに直結することを再認識した。ポリマープレートは、デジタル画像を簡単に取り込むことができるため、精密な映像表現が可能となる。また、ノントキシックなインクを使用することができ、環境にも配慮した方法で印刷が行える点が特に優れている。さらに、ポリマープレートでもインクの重厚感が得られるため、従来のインタリオ技法と同じように、深みのある印刷結果を得ることが考えられる。

このマルメでの制作環境において、施設の設備は十分に整備され、アーティストが自由かつ創造的に制作を行える環境が確保されていることが明らかとなった。その特徴として、日本と異なる点がいくつかあるが、特に注目すべきは、テクニックと表現手法の密接な関係にある。日本では、印刷技術から生まれるイメージが、オーソドックスな版画表現として確立されている。しかし、このマルメの環境では、印刷技術そのものがイメージを定着させる手法として位置付けられており、単なる複製手段を超えた表現として捉えられている。このアプローチは、版画を選択する理由と印刷手法の役割に対する認識の違いに現れている。具体的には、日本では版画が一種の独立した表現形式として、技術的な制約や物理的

な特徴（例えば、インクの盛り上がり、版の凹凸など）を活かしながら、アーティスト的な表現が追求される。一方、マルメでは印刷技術自体が表現手段の一部として、作品に必要なニュアンスやエフェクトを付加するために使用されている。このように、版画が表現のために選ばれる場合、そこには「複製化」や「技術的特性」に焦点が当てられ、表現の多様性や異なる技法の組み合わせが可能であるという点が強調されている。

日本における版画は、版種（木版、銅版、リトグラフなど）ごとに独自の表現ポリシーを持ち、それが文化的・歴史的な背景として強く影響している。しかし、このマルメの環境では、版画に対するそうした「形式的」なポリシーや感覚が希薄であり、印刷という技法そのものが、自由な表現を引き出すための道具として用いられている。この違いは、表現の純粋さという点では共通しているものの、選ばれた技法に対するアプローチやその意識に大きな隔たりがあることを示している。また、この観点では、アーティストブック制作において非常に有効に活用できるポテンシャルを有している。特に、印刷技法が単なる再現手段としてではなく、表現の一部として積極的に活用されることで、作品に新たな深みと多様性を与えることが可能となる。版画的な印刷技術を使用することにより、偶然的な質感や物理的なインパクトが加わり、デジタルメディアや他の再現技術では得られない独自の表現が生まれる。また、印刷技法そのものが一つのストーリーやテーマを語る手段ともなり、制作過程における技術的な選択が最終的なビジュアルやコンセプトに深い影響を与えることになる。そこには、本の文化がただテキストを綴るだけのものではなく、思いや尊さをつなぐメディアとしての価値を強く感じることができる。そ

れは単なる情報の集積ではなく、アートを紡ぐ手段としての意義を持ち、見る者に深い感動を与えるものだ。制作過程における慎重な技術選択や、思いを込めた表現が本というメディアに込められ、作品として具現化されていく姿勢に深い印象を与えている。このような視点を通じて、アーティストブックにおける表現がより豊かに伝わり、鑑賞者に新たな発見や感情的な響きを与える可能性が広がっていると実感することになった。

さらに、製本に関する工夫も非常に深いものがあつた。アーティストブックとしての本の価値を高める重要な要素である。製本は単なる技術的な手続きにとどまらず、作品の表現を補完し、さらに強調する手段となり得る。ページの配置や綴じ方、紙質、装丁など、細部にわたる工夫が、与える印象や作品の持つメッセージを大きく変える。製本における手作業のプロセスを通じて、作品に温かみや個性が加わることがある。精緻に選ばれた紙や手作りの装丁、または表紙の素材といった選択が、視覚的、触覚的な体験を深め、作品に一層の重みを与える。さらに、ページ間の空間やレイアウトの工夫によって、読者に流れるような視覚的リズムを作り出し、物語やテーマの進行に合わせた感情的な影響を与えることができる。このように、製本は本そのものの物理的な存在としての意味を持ち、アーティストブックの表現を支える大切な側面である。本の文化が、ただテキストを伝えるだけでなく、作品としての価値を持つメディアであることを再確認させられる瞬間であり、製本そのものが一つのアートフォームとして成立していると感じる。今回の滞在制作では、期間の都合上、アーティストブックに取り組むことは出来なかったが、次の機会にその取り組みを実施したい。

今回の滞在制作の過程で、KKVのアー

ティストや施設管理者との関係性を築くことができた。この交流は、今後の制作活動や研究における国際的な協力の可能性を広げるものである。アートスペースが地域社会と深く結びつき、そこで築かれた文化的ネットワークがどのようにアーティストの創作活動に影響を与えるかを実感した。マルメのアートコミュニティは、多様な背景を持つアーティストが集まり、地域の文化や歴史に根ざした活動を展開している。このような環境の中で、アーティストとしての自己表現を深めるとともに、地域との対話を通じて新たなインスピレーションを得ることができる地域性を持っていた。さらに、片山浩氏やエヴァ・ヘイドストロム氏の協力を得て、現地のアーティスト・イン・レジデンス事業の現状や運営方法に関する知見も深まった。これらのネットワークは、大分との文化交流を含む新たなプロジェクトの可能性を見出す基盤となる。大分は、自然豊かな環境と歴史的な背景を持ち、近年ではアートや文化活動が盛んに行われる地域として注目を集めている。特に、大分の地域社会とのネットワーク構築は、地域の文化資源を活用し、地域住民やアート関係者との対話を深めることによって、地域特有の文化をアートの中で表現する新たな可能性を開く鍵となるだろう。また、大分のアート教育機関や団体との連携を通じて、アーティスト同士の情報交換や共同制作を行い、地域全体としての文化的成長を促すことができると期待している。エヴァ・ヘイドストロム氏とは前向きな交流計画を進める約束を得るところに至った。総じて、本調査により得られた知見は、アートブック制作や教育的観点からも非常に有益であり、日本国内での応用の可能性を検討する上で貴重な資料となった。2025年1月には、アーティスト・クリエイターによる別府の魅力発信活動事業の助成金を得て、KKV

のアーティストの招聘を行い、別府市内に制作の拠点を設置。大分県立芸術文化短期大学内のグラフィックアートコースの印刷室機能を活かし、「別府の魅力発信」をテーマとしたアーティストブックの作成を行った。国外アーティストにヤスミナ・カルリ・マルムステン、国内アーティストに中桐聡美、併せて在住アーティストに於保政昭、加藤恵、野村菜美と交えて、作品展示とアーティストトークを実施した。これは、着実な交流機会を実現させることで同時に、アーティスト・イン・レジデンス事業や異文化交流の促進に向けた具体的な指針を提供するものであると結論づけることができる。今後は、これらの成果をもとにさらなる実践と研究を重ね、継続することを前提として、国際的な交流の新たな形を模索していきたいと考えている。



07 参考文献

KKV Grafik Malmö
<https://www.kkvgrafikmalmo.se>
 Artists' book archive
<https://artistsbooksarchivemalmo.se>

NON-TOXIC INTAGLIO
 PRINTMAKING
 ノントキシック銅版画への誘い
 湊七雄（福井大学）

北山銅版画室 /Studio Kitayama
<https://www.hanga.info>

